

P1-21-26 妊娠早期に部分胞状奇胎が疑われた症例の転帰に関する検討

熊本大

三好潤也, 坂口 勲, 内野貴久子, 本田律生, 田代浩徳, 大場 隆, 片渕秀隆

【目的】部分胞状奇胎の多くは、妊娠早期の超音波断層法で胎嚢を取り巻く絨毛部分に多数の囊胞様構造が認められることが診断の契機となる。しかしながら、正常妊娠でも類似の所見が認められることがあり、妊娠早期における鑑別は必ずしも容易ではない。今回、当施設で妊娠初期に部分胞状奇胎が疑われた症例の転帰について検討した。【方法】2007年から2010年の4年間に部分胞状奇胎が疑われた症例について、超音波断層法所見と血中hCG値の経時的変化ならびに転帰について検討した。【成績】部分胞状奇胎が疑われた症例は12例で、初診時の妊娠週数は5-15週（平均：8.8週）で、8例に心拍を伴う胎芽が確認された。最終診断は部分胞状奇胎が3例、全胞状奇胎が1例で、が8例が正常の妊娠経過を辿った。部分胞状奇胎の3例は稽留流産（n=2）や胎児水腫（n=1）の診断で8-16週（平均：11.0週）に、全胞状奇胎の1例は妊娠8週に子宮内容除去術を行った。正常の経過を辿った8例は、初診時に6例で心拍が認められ、囊胞状構造は胎児頭臀長が21-60mm（平均：43mm）の範囲で全例消失した。血中hCG値は129,264-264,100mIU/ml（平均：215,296mIU/ml）を最高に低下した。8例中1例が妊娠11週で人工流産となり、7例は分娩に至り、分娩時週数は 38.8 ± 1.2 週、出生体重は 2962 ± 463 gで児に異常所見はなく、胎盤には肉眼的に胞状奇胎を疑う所見は認められなかった。【結論】妊娠早期に部分胞状奇胎が疑われた症例の67%は正常の妊娠経過であった。部分胞状奇胎と正常妊娠の鑑別のためには、経時的な観察により囊胞部分が減少・消失すること、そして血中hCG値の上昇が一過性であることを確認する必要があると考えられた。

P1-21-27 ヒト羊膜におけるタイトジャンクションの発現変化

慶應大

門平育子, 田中 守, 梅津 桃, 峰岸一宏, 宮越 敬, 青木大輔, 吉村泰典

【目的】一般に上皮細胞を通じた物質輸送は、細胞壁のタイトジャンクション(TJs)により制御されていることが知られているが、これまでヒト羊膜におけるTJsの報告はない。そこで本研究の目的は、ヒト羊膜上皮細胞におけるTJs発現の有無およびTJsの羊膜における役割を検討することとした。【方法】術前に同意をえられた予定帝王切開症例において採取した羊膜から、羊膜上皮細胞層のみを分離した。1. RNAと蛋白質を抽出後、代表的なTJs構成分子のRT-PCRとimmunoblottingをおこなった。2. 実験1で確認されたTJs構成分子の抗体を用いて免疫組織染色をおこない、TJsの細胞内局在を確認した。3. 羊膜上皮の培養細胞をもちいて、陣痛発来時に羊水中で増加するコルチゾールによるTJsへの作用を確認するため、培養液中にデキサメサゾンを追加した場合のTJsの発現変化を検討した。本研究は学内倫理委員会の承認を得ている。【成績】1. 羊膜上皮細胞において、TJs構成分子の中でoccludin・ZO-1・claudin-4・claudin-7の発現を確認した。2. 免疫組織染色法では、TJsは妊娠35週には細胞の側壁に局在し、妊娠37週に細胞質へ移動していた。また、妊娠37週の羊膜上皮を組織培養すると、TJsは細胞質から側壁へ局在変化していた。3. 羊膜上皮の培養細胞では、デキサメサゾンによりTJsの発現が抑制された。【結論】羊膜上皮細胞にはTJsの構成分子が発現しており、妊娠末期にはこれらのTJsの細胞内局在が変化していた。羊膜上皮細胞層では妊娠末期にTJs分子による細胞間の結合が弱まっており、陣痛発来の過程に関与している可能性が示唆された。

P1-21-28 臍帯血幹細胞移植のための採取法改良に関する研究

東京女子医大八千代医療センター

都築陽欧子, 千葉純子, 草西多香子, 諸岡雅子, 本田能久, 中島義之, 坂井昌人, 正岡直樹

【目的】我が国において臍帯血幹細胞移植は成人領域でも増加し、骨髓移植数に匹敵するものとなってきた。しかし成人の移植にあたっては十分な有核細胞数が必要なため、より多量の臍帯血採取が必須となる。今回、ソフト・多孔性穿刺針、臍帯固定器具など効果的に臍帯血を採取するために考案された臍帯血採取バック(ニプロ社、未認可)の有効性について検討することを目的とした。【方法】当院倫理委員会の承認のうえ、平成21年2月1日から平成21年12月31日までの間に分娩した、産科合併症を有しない経陰分娩100症例を対象とした。内訳は従来型の川澄バックでの採取50例、新採取バック50例である。すべての妊婦からは文書によって臍帯血採取の同意を得た。また両群を無作為化するため、奇数日の分娩は従来型バックで、偶数日の分娩は新バックでの採取とした。【成績】1) 臍帯血採取週数、初産・経産、母体年齢、新生児体重、臍帯血採取量において2群間に有意差は認められなかった。2) 臍帯血採取量は現行バック 80.2 ± 26.9 gに対し、新バックで 96.8 ± 28.2 gと有意に採取量が多量となった。3) 前期に採取した25例と新採取法に習熟した後期の25例とで比較したところ、現行バックは差が認められなかったが、新採取バックは後期で前期に比較し平均で10.2ml増加し、さらに後期において現行バックと比較し有意に採取量が多くなった。4) 両群の有核細胞数・濃度、単核球数・濃度、CD34陽性細胞数・濃度、CFU-GM数・濃度には有意な差は認められなかった。【結論】新バックは、習熟すれば臍帯血採取量増加のための有用な手段となると考えられた。